



本殿横特設舞台上の豆撒き(1回)

宗像

遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

二月一日と三日の二日間、三年目を迎えた宗像観光協会(吉武邦彦会長)との共催による「むなかた大節分祭」が行われ、「福」を授かるうとする参拝者約三、〇〇〇人が両日で参集し、寒さを感じさせない熱気で賑わった。

一日は月次祭終了後の午前十一時三〇分、神職と共に観光協会関係者と、地元宗像に拠点をおくプロラグビーチーム「福岡サンックスブルース」の選手が特設舞台上上がり、豆撒きが行われた。同協会と神社で袋詰めを行った凡そ六万袋の福豆の内、約四万袋が撒かれた。前日に氏子青年会員の御奉仕で本殿横に設置された特設舞台前には、今か今かと待ち構える参拝者が押し寄せ、参拝者の入場制限を行いながら二



むなかた大節分祭

二月一・三日の両日に
約三、〇〇〇人が参集

3月祭事暦

毎月1-15日	月次祭
午前10時～	高宮祭
	第二宮・第三宮祭
	宗像護国神社祭(1日)
午前11時～	総社祭
	浦安舞奉奏(1日)
	豊栄舞奉奏(15日)
4日	氏貞公墓前祭
午前11時～	於=宗像市上八氏貞公墓前
	本年は仏式で斎行
19日	松尾神社祭
午前11時～	
20日	皇霊殿遙拜式
午前10時～	

今、元来の日本型会社経営が見直されつつあるという▼サブプライムローンに端を発した米国発、世界同時不況より、我が国でも大企業を始め大幅な人員削減のニュースが連日のように流される。企業としても苦渋の選択であろう。が、そもそも日本には「和の精神」と「情」によって会社を運営するという会社観があり、経営者も社員も一つの家族で、強い共同体意識と信頼関係により会社が存在した。一方、利益追求と市場原理主義の米国型資本主義とは対極関係にあった。しかし構造改革を旗標に日本型経営システム捨て、グローバルズムという米国型へと移行した当然の結果といえるのではないか▼「大家族主義」「人間尊重」を経営理念に掲げた出光興産創業者・出光佐三は敗戦によつて、それまでの事業が無となり、借金山だけが残った。そんな状況下にあつても二人も誠首しない。ここまでやってこられた原動力は、金でも物の力でもない「人の力」ではなかったか。その仲間を見捨てることは私にはできない。会社がいよいよ駄目ならば、みんなで乞食してもいいではないか」と言い再興に取り掛かった。この日本精神こそが戦後復興の柱となった。又、戦後マッカーサーは「日本人は労働に幸福感を覚える民族である」と言い、それを労働の尊厳と呼んでいる▼欧米では労働は神が与えた罰であるという。しかし日本では「働く」とは「傍を楽にする」という語源にあり、神話では神様も働いておられる。祭祀は神話の再現であり、働く事は神業なのである。(床)

装束店	〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
	フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店	〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
	フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店	〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
	フリーダイヤル 0120-075-820

神具・装束・授与品

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567



祈願殿での豆撒き(3日)

回まかれた。午後二時からの二回目も同様に豆まきが行われ、さらに賑わいをみせた。福豆のなかには、幻の高級魚と称される「アラ」の鍋セットや干物、宗像の野菜、生花などの特産品や、地元ホテルの宿泊券、道の駅「むなかた」のお買物券に加え、当大社からは「節分厄除みくじ」の一回無料券

や、神宝館の無料拝観券を協賛し福豆に付けられた。一方同時刻、本殿授与所前では児童のみを対象とした「子供豆撒き」も行われ、福岡サニックスブルースの選手らが福豆を撒き、子供たちの黄色い歓声が周囲にこだました。境内では世界遺産暫定リスト入りした「沖ノ島」を、より多くの皆様に知っていただくようと専用ブースも設営され、また同協会による工芸品の販売など様々な露店が出店され賑わいをみせていた。なかでも「チャリティゼンさい」は大盛況で長蛇の列が出来ていた。

また、昨年は生憎の雨の中で演奏された玄界高校邦楽部による「宗像太鼓」も、本年は境内で演奏され、節分の賑わいに花を添え太鼓の音が鳴り響いた。三日は生憎の雨模様となったため急



子供コーナー(3日)

遽祈願殿で行うこととなり、午前十一時災難消除を願う節分祭が古式に則り斎行された。責任役員、氏子会、地元総代に加え、年男にあたられる方、「風の子保育園」「平等寺保育園」の園児約五十名らが参列する中、神島宮司が無病息災・延命招福の祝詞を奏上。続いて石舞台上左右二手に分かれた神職により追儺の神事「鳴弦の儀」が執り行われた。二人の神職が桃弓・葦矢を携えて、一人は天空に向け、もう一人は地上に向けて矢を三度射る所作を行い、次に弦を三度打ち天地の邪気を祓い清めた。その後、各代表が玉串を捧げ今年一年の厄除開運を祈念した。



節分厄除みくじ(1日)

祭典後は神職と年男が祈願殿二階ロビーに移動。平日にもかかわらず詰め掛けた大勢の参拝者が待ち受ける中、高向権宮司による「鬼は外、福は内」の発声と共に福豆がまかれると、本殿周辺は瞬く間に熱気に包まれ、各々福運を手にした。本年は宗像観光協会が中心となり、宗像大社氏子青年会、宗像歴史観光ボランティア、福岡サニックスブルース、玄洋むなかた、沖ノ島物語実行委員会の諸団体に助成いただいたほか、道の駅「むなかた」、RKB毎日放送にも特別御協賛を賜った。御奉仕いただきました各団体各位には衷心より御礼申し上げます。



当たり券の引換所(1日)



沖ノ島PRコーナー(1日)



チャリティゼンさい(1日)



玄界高・邦楽部による「宗像太鼓」

建国祭斎行

天候に恵まれ、春を思わせる穏やかな陽気となった二月十一日午前十一時、本殿で我々の誕生を祝う建国祭が厳粛に斎行された。

定刻、神島宮司以下奉仕神職・巫女、参列者が参進、所定の座に着座し祭典を開始。神武天皇建国以来の国体護持と皇室・国家、国民の弥栄を祈念



して宮司が祝詞を奏上、続いて巫女による浦安舞奉奏、各代表者が玉串拝礼を執り行い、祭典は滞り無く終了した。今年、昭和四十一年に「建国記念の日」が制定されてから四十四年目となる。「日本書紀」では辛酉の年春一月一日、神武天皇が大和の橿原の地に即位式を挙げられた日、

太陽暦の採用に伴い現在の二月十一日となり「紀元節」として我が国の誕生の日と制定され、大東亜戦争敗戦により廃止される迄、全国に広がっていた。現在でもこの日には、全国各地で様々な神事や式典等の奉祝行事が行われている。この「建国記念の日」の意義を各々充分に認識し、世界でも有数の文化・歴史・伝統を持つ我が国を子孫に継承していかななくてはならない。

「世界遺産登録推進会議」発足

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産暫定リスト記載を受け、登録実現に向け「世界遺産登録推進会議」が発足、一月二十四日宗像市のグローバルアリーナにおいて、関係者が参加し初会議が開催された。

同会議は、麻生福岡県知事、谷井宗像市長、池浦福津市長を始め行政、市民代表、文化・教育、経済団体、地元関係団体等各界から選出された二十八人で構成される。

会議では、会長に麻生知事、副会長に谷井・池浦両市長の就任が承認されると共に、学術的価値を検証する専門家会議の設置、二月二十八日に福津市津屋崎のカメリアホールでシンポジウムの開催を決定。五年後の世界遺産登録を目指し、活動を展開すること

遺産推進会議



グローバルアリーナで開かれた会議の様子

合意した。その後意見交換となり、認知度や意識の高揚、地域産業への影響、構成範囲の再検討等さまざまな点が指摘された。最後に麻生知事の「本件は普遍的価値があるとの評価であり、今日まで継承されてきた祭祀、構成資産を今後も守り続



出席者からの質問に答える高向権宮司



けていくこと」「観光地化することが目的ではなく、地域に世界に誇れる資産があることを認識し、子々孫々に伝えることが重要である」「今後専門的な検討を十分に行っていきたい」との基本方針をまとめ、同会議を推進することで一致した。

沖ノ島の鳥たち ③

小屋島で繁殖する天然記念物

「カンムリウミスズメ」

武石全慈(タケイシ マサヨシ)
北九州市立自然史・歴史博物館学芸員
昭和28年(1953)1月生れ。北九州市在住。
昭和61年(1986)から北九州市立自然史
博物館(現・自然史・歴史博物館)に勤務。鳥
類担当。日本鳥学会、日本鳥類標識協会など
の会員。

沖ノ島には注目に値する鳥類が色々ありますが、その中の一つにカンムリウミスズメがいます。黒・白・灰色の地味な色合いの全長二十四センチほどの小型の海鳥で、繁殖期には頭頂部に長くのびた冠羽が見られる



カンムリウミスズメの雛鳥

のが特徴です。この鳥は日本列島近海にしか生息しておらず、国の天然記念物であるとともに、国際自然保護連合のレッドリストで国際的な絶滅危惧種にも指定されています。国内で知られている繁殖地は十カ所前後と少なく、一カ所当りの繁殖数も少ないものです。昭和二十年代の米軍進駐時に、繁殖地の伊豆諸島三宅島の岩礁が米空軍の爆撃演習目標とされてきたことが知られ、学者たちが抗議すると即座に演習が中止された事がありました。これはカンムリウミスズメの国際的な貴重さをよく物語っています。

さて、昭和六十二(一九八七)年四月、カンムリウミスズメの成鳥十一羽の死骸が武下雅文氏らによ

って私の勤務する博物館へ持ちこまれました。同氏らは環境庁の標識調査で沖ノ島の属島小屋島に出かけてきたところでした。当時小屋島は西日本では最も多くカンムリウミスズメが繁殖している場所として知られていました。

小屋島は直径が約一九〇メートルの小さな無人島で、その一面にはヒゲスゲが密生した草地があり、その地中の岩のすき間でカンムリウミスズメが三月五月に繁殖します。武下氏はこの草地のあちこちでカンムリウミスズメの死骸を見つけましたが、繁殖中の生きている親鳥の姿を見つけることはできませんでした。それより十三年前の昭和四十九(一九七四)年の調査時には約二〇〇個の巣があると推定されていましたから、繁殖中の親鳥が見つからないという事はかなり異常な

状態であると思われる。また小屋島では、七月八月には別の海鳥のヒメクロウミツバメも繁殖していましたので、この繁殖への影響も心配されました。そこですぐに調査が開始され私もそれに加わりました。

五、八月に行なわれた調査では、カンムリウミスズメで一四五羽、ヒメクロウミツバメで八十羽の成鳥の死体が回収され、死亡総数はカンムリウミスズメで四一四羽、ヒメクロウミツバメで三〇四羽と推定されました。この値は当時知られていた小屋島での生息数にほぼ匹敵し、親鳥はほぼ全滅に近いのではないかと考えられました。

この大量死亡の原因はドブネズミによる捕食であろうと考えられました。調査時に仕掛けた罠にドブネズミが次々にかかりました。生け捕りにしたドブネズミを持ち帰り、カンムリウミスズメとほぼ同じ大きさの生きたウズラを与えると、ドブネズミはウズラに



小屋島

積極的に飛びかかりました。ウズラは骨と羽を残して食われてしまい、食べ残しの状態はちやうどカンムリウミスズメの死骸とよく似ていました。もちろん飛んで逃げればドブネズミに食べられることはないでしょうが、狭い穴の中で卵を抱いているカンムリウミスズメは、鳥ではあつても飛べない状態にいるのです。事実多くの死骸が巣穴から見つかっています。他に捕食者の可能性のある鳥獣類・爬虫類は見当たりませんでした。

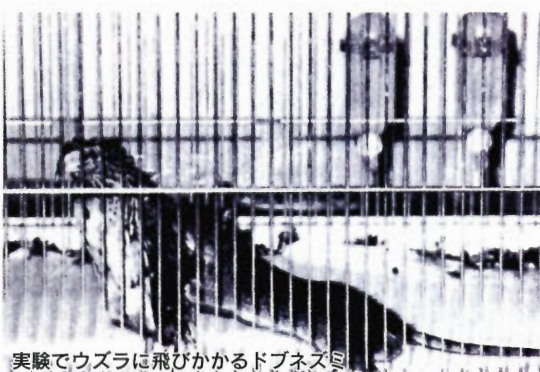
た。繁殖時期と餌がカンムリウミスズメとは大いに異なるものの、繁殖場所が同じであるヒメクロウミツバメも大量に死亡していることから、飢え・病気・悪天候が原因とは考えられませんが、原因はドブネズミにあると考えられ、小屋島から完全に駆除しようと殺鼠剤が何度も散布されました。その結果、翌年の繁殖期にはドブネズミの姿は見られなくなりまし



カンムリウミスズメの死骸

しかしカンムリウミスズメの繁殖は見られませんでしたが、それから九年後の一九九六年四月、小屋島で徹底的にカンムリウミスズメを探してみ

ました。日中にはヒゲスゲ草地で巣を探し、夜間にはカスミ網で捕獲を試み環境庁の標識リングをつけて放しました。ネズミの痕跡はありませんでしたが、巣は一カ所しか見つからず、成鳥は三羽しか捕獲できませんでした。夜間に巣穴に出入りする際の鳴き声も、わずかし



実験でウズラに飛びかかるドブネズミ

の増加が望まれるところですが、小屋島が再びカンムリウミスズメの繁殖でにぎわう場所に



小屋島で捕獲されたドブネズミ

宗像大社菊花会新年総会開催

一月二十五日、宗像大社菊花会の新年総会が、千々和正信会長以下約六十名の会員出席のもと神湊の魚屋旅館で開催された。

総会では先ず第三十八回大会の終了報告がなされ、天皇陛下即位二十年記念花壇に対する御礼や、本年の大会が再来年に控える第四十回記念大会の準備を兼ねた重要な大会になることなどが話し合われた。

その他第三十九回大会の日程が決まり、今年は菊の搬出作業の都合で十一月一日～二十二日と例年より一日短い会期となること

が決定された。次いで、第三十五回九州大会の競技花の選定が行われたが、これは四月の理事会で決定することとなった。

総会終了後の菊作り講習会では、福岡県農業総合試験場の堤隆文部長をお招きし「菊の病害虫予防について」と題して講演が行

われた。大会には病害虫に冒された菊は出品できない規約となつているので、有効な予防法を皆熱心に聴き入っていた。講習会後は、神島宮司及び共催となる宗像観光協会の吉武会長も交えての懇親会が催され、会員の皆様は互いの菊作りや今年ほどの部門に出品するかなどに大いに話はず



ませ今年の新総会は終了した。

文化財防火訓練

文化財所有者、各関係機関が協力し防火訓練等、文化財防火運動を行っている。

昭和二十四年(一九四九)一月二十六日、世界最古の木造建築である法隆寺の金堂で出火、貴重な壁画が焼損し国民に衝撃を与えた。これを契機に、文化財保護の思想は高まりをみせる。又、一年の内で一・二月は最も火災が発生しやすい時期であるという事で昭和三十年に一月二十六日を「文化財防火デー」と定めた。以来、毎年この時期に各地で文



化財所有者、各関係機関が協力し防火訓練等、文化財防火運動を行っている。

当大社でも毎年、この日に文化財防火訓練を行っており今年で三十五回目を迎えた。当日は気温低く、冷たい雨が降りしきるなか、例年通り大社自衛消防団、宗像地区消防本部、宗像市消防団、宗像警察署(地元四駐在所)合同で行われた。

訓練は午前九時五〇分、本殿裏の森から出火、国指定重要文化財の本殿・拜殿に火勢が迫っていると想定で開始された。

火災を発見した巫女が直ちに火災報知器を押し、社務所に通報。自衛消防団は本殿へ急行。巫女並びに宗像市女性消防団がバケツリレーを行い、消火栓から職員、地元の宗像市消防団第十一分団が放水を行い初期消火にあたった。

午前十時、折からの強風にあおられ、祈願殿に延焼拡大したとの想定で一一九番通報。通報を受けた宗像地区消防本部・宗像市消防団の各消防車両がサイレンを鳴らしながら

第一駐車場に集結。各隊、統制のとれた動きで配置につき、一斉に祈願殿屋根に放水を開始。本番さながらの消火活動を繰り広げた。

消火活動終了後、宗像消防署長が講評、宗像市・谷井市長、宗像市消防団・占部団長が挨拶、最後に当社高向権宮司が防火訓練協力の御礼挨拶を行い防火訓練を無事終了した。

境内には、消火栓、消火器が数多く設置されており、訓練終了後、配置場所、使用方法、もしもの際に最低限何をしなければならぬかという事を、当直業務で神社に泊まる事が多い神職、管理員を中心に確認作業を行った。



平成二十二年 宗像大社海洋神事奉賛会初会合

一月三十日、平成二十一年

宗像大社海洋神事奉賛会の初会合が当大社にて開催され、村田繁美会長をはじめ各漁協代表の方々五名、当大社より神島宮司以下七名が出席し、本年の海洋神事に関する審議がなされた。

当日は会合に先立ち本殿で大漁祈願祭が斎行され、一年の大漁満足・海上安全が祈念された。

会合では先ず昨年の皇室への若布献上の報告が行われ、次いで本年の業務担当である松林権禰宜の紹介があり業務が引継がれた。また献上時の漁協代表随行者は、宗像漁協福岡支所と津屋崎漁協から選定頂くことが決まった。

次に昨年の「みあれ祭」について審議され、以前より大島から神湊への海上神幸の隊列についての安全性が問

題視されていたが、一昨年・昨年と行った一列縦列での海上神幸が安全で望ましい事が確認され、全会一致で本年もそのように神幸されることが決まった。

皇室への献上用若布は地島沖で採取されるが、今のところ順調な生育をみせ本年は三月中旬に献上される予定である。



(続)

浜の寄物

233



いいただし

宮古島・狩俣浜に漂着していたタイマイは腐敗がひどく、散乱していた甲片を拾ってきた。タイマイは脊椎動物門・爬虫類・カメ目・ウミガメ科に分類される。玳瑁たいまいと書く。甲長四〇〜六〇cm、体重五〇kgほどの小形であるが、大きなものは甲長八〇cm・二二〇kgになるものもある。甲羅は暗赤褐色か黒褐色で、甲羅の鱗板は屋根瓦状になって重



回収したべつ甲

なりあっている。甲を日光にかざして見ると、黒と黄色の不規則な細斑の文様が見える。腹甲は淡い黄色から、成亀になると暗黄色となる。口先が細くなつて、かぎ状に曲っているの

分布は熱帯、亜熱帯地方の海に。海流に乗って稀に、死骸や生きたものが日本にも漂着するが、これはタイマイの亜種という。甲が高級装身具に使われるところから、乱獲され絶滅危惧種となっている。その玳瑁の細工されたものが鼈甲かめこうと称しているが、本来べつ甲は陸ガメのストップンのことであり、誤用されている。タイマイの甲は櫛くし、筭そろ



べつ甲の腹甲

で、英名では、ホークスビルール(たかのようになくちばしをもつかメ)といわれる。大きくな変化をとげる。海に散乱していた甲片は六片あった。腹甲の部分は、まとも

甲長四十五cmほど、表面には海藻等が付着していた。亀本体を持つて帰えられる状態ではなかったので、記録として、甲表の一部と腹甲の部分にとどめた。家に持ちかえり付着物を除いて、一日乾燥させた。甲片のど

春まつりの御案内

春季大祭を左記行事日程で斎行致しますので、皆様方お誘いの上御参拝下さいますようお願い申し上げます。

三月三十一日(火) 午後五時 総社地主祭

三月三十一日(火) 午後六時 宵宮祭

四月 一日(水) 午前十一時 一日祭

四月 二日(木) 午前十一時 二日祭(海洋神事事業功労者表彰)

四月 二日(木) 午前十一時 二日祭(海洋神事事業功労者表彰)

午後二時 宗像護国神社

高宮祭

第二宮・第三宮祭

交通安全講社祭

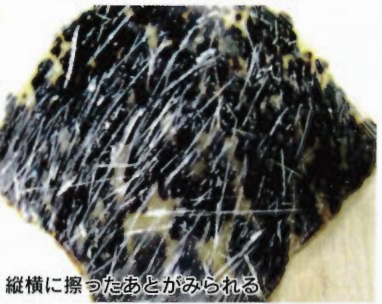
献茶祭(南坊流小方社中)

れにも縦横の傷がみられた。珊瑚礁などで活動するために、甲表を擦ったためであろうか。一九九三年十二月、福津市北原浜で漂着したものは、甲長三〇cmの稚亀であったが、そのような擦り傷はなかった。

狩俣のタイマイの甲片の一枚を資料館の横田義章氏が磨いてみた。サンドペーパーの2000ぐらいからはじめ次第に表面が滑らかにになり、細かい単位のものにおとし、水ペーパーの800-1500-2000としていき、途中でミニルータなども使った。黒と黄色の斑も浮かび美麗になり、棕の木の葉も使い光沢もできた。昨年暮れに長崎を歩いたがべつ甲屋もまだいくつが残っていた。



するどいタイマイのくちばし



縦横に擦ったあとがみられる

第五七一回 宗像大社歌会詠草

大野展男選
毎月25日メ切

【評】

留守電話になると知りつつ子の声の他人行儀をしみじみと聴く人間の声のだが、留守番電話の声には感情がこもっていつ何か馴染めない。そこをうまく詠っている。上句の「なる」は鳴るか成るか判らないし破調なので「留守電の声と知りつつ」とする法もある。

宗像市 田野 森 甲子

幼二人かへりし後の玄関に小石が六つ転がりてゐる

三句以下を具体的に述べたことにより、幼の年令も想像できるし、何より所謂、孫歌の域を超えた風情のある一首となった。

福津市 若木台 野間 精一

枝のみになりし寒の山吹を束ねて妻は紐にくくれり

特別のことは言っていないが、老夫婦の日常の一齣を詠つて趣がある。二句は「なりたる寒の」と定型にしたい。

宗像市 大島 杉田 禮子

老若の漁夫みな酔ひて賑やかに船祝ひせし頃なつかしき

ローカル色豊かなのがいい。三句は二句「みな酔ひて」があり蛇足なので「正月の」はどうだろうか、結句も「ころのなつかし」でいい。

宗像市 自由ヶ丘 一木 照代

韓国は美人多しと思ひきや世界で一番整形の国

読後一種のさわやかさを感じるの、素直に述べたせいだろう。三句は「思ひしに」、結句は「整形多しと」がいい。

宗像市 土穴 山本 静子

眼鏡やの社長自ら直しくれお代はいらぬと眼鏡かけくるる

思いもよらぬ親切に感激した作者。結句の眼鏡はくどいので「かけてくるるも」でいい。

宗像市 田久 巻 桔梗

大会の応募歌五通とどきたり去年トップの人ままじりて

トップはトップ入選かトップ応募か判りずらいので、三句を「早やとどく」とすれば、はつきりするのでは。

宗像市 田久 井上 光

寒き朝萎びし老の懐かしむ行進曲のラッパの響き勇まし

「萎びし老い」が面白い。老いのは老いがとし、結句の「勇まし」は言い過ぎなので「行進曲のラッパの響」としたい。

【評】 北九州市 八幡西区 吉田ウト子
川瘦せせて乾く根石の間を逝く水泡は虹の彩に震へて
名詞と形容動詞が多くて歌がうるさくなっているのが残念。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ

朝の光まだうす暗し介護くる刻に起き出て戸の鍵をあく

律儀な作者像が見える一首だが、ぶつぶつと切れているし、「介護くる」も無理な表現なのであしたまだうす暗きより来るヘルパー起き出て戸の鍵をあけ置く、はいかが。

福津市 光陽台 香月 照子

兩戸うつ風に目ざめて案じをり四十過ぎて一人の息子

結婚願望のうすれた世相とは言え、吾が子となればやはり気になる。上句と下句が付き過ぎているのが難。よそじは四十路が正しい。

福岡市 南区 加野シノブ

しんしんと降り続きたる庭の雪枝にさしたる蜜柑ヒヨ来る

雪の朝の一風景であるが、「しんしん」は常識的表現だし全体的にリズムが切れるので、朝より降りつづきある雪の庭枝に刺したる蜜柑にくる鴨、としたい。

北九州市 八幡西区 豊田 光子

亡夫の軍人恩給とわが年金交互に来るることなく飢うることなく

下句に豊田さんの人間像が見えて好ましい。ただ上句はリズムが無いので「年金と夫の軍人恩給で」と、リズムを整えたい。

福津市 花見 佐藤 純一

南郷の武蔵川部屋若人はマクドナルドで勝率語る

時代相があり面白いが若人は若い力士のことか、とすれば勝率でなく勝星とすべきだろう。

うきは市 浮羽町 向 則正

老いづきしわが指先のかわききて新聞めくれず疎ましく思ふ

老いの悲しみの一つ、ただ「思ふ」まで言わない方がいいので下句は「新聞めくれぬことも疎まし」

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

初詣願番待ちて鈴ならす八十路の我の無事を祈りて

宗像市 日の里 大和美由紀

晴れ渡るみ空に響く和太鼓で玉洗ひ式神事はじまる

福岡市 南区 井田有久衣

みやしろの千木に烏のとまりいてじつと動かず元旦の朝

【評】 新春の社を詠いそれぞれの捉え方があり興味を引く

選者詠



錦蛇の夢を見買ひし宝くじ

果敢無し十枚だけで良かった

鶴らの通ひくるゆる躰の

水を二日に一度は替へる

いま鳴くはみそささいよと思ひつつ

またまどろみの谷に墮ちゆく

第五四六回 俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝
対島見ゆ山懐や仏の座

編集後記

妻の里帰り出産や愚息に会いにと、年末と節分祭明けの二度伊勢へ行かせていただきました。そして、二度とも長男と二人で神宮へ参拝しました。御正殿まで距離があるため、必ず途中から小生が背負うことになるのですが、久しぶりの再会で嬉しい重みでした。▼二月の参拝時は宇治橋が工事中で、すぐ横の仮設鉄橋を渡りました。あとで知りましたが、今年が本来の式年遷宮の年だそうです。戦後の混乱期、昭和二十四年は御正殿の造替まで叶わず、四年先延ばしとなる中宇治橋は架け替えられそれから三度目の架け替えが本年です。▼戦国時代も同様にプランクがあり、神宮式年遷宮は平和・不戦の象徴ともいえるでしょう。今月もまた次男の初宮詣で神宮を訪れる予定です。(塚)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 セネラルアサヒ
印刷 セネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共1,000円